わたしたちと宗教

林　研

こんにちは。今回の講座を担当することになりました林です。今日は、現代の日本に暮らしている私たちが、宗教とどのような関係を持っているのだろうか、ということについてお話ししたいと思います。関係がないと思っている人は結構多いと思うんですが、実はそうでもないんだ、ということです。今日お伝えしたいのは、ずばり、「宗教は決して特別なものではなくて、人は誰しも宗教的なものと関わりながら生活をしている」ということです。宗教を勉強するというと、そんなことに意味があるのか、と思うかもしれないですが、人が誰しも宗教的なものと関わっているならば、宗教を知るということは人間を知るということに直結するんです。だから、宗教について勉強するとか、知るということは大事だということになるんですね。

今日の話題ですけれども、前半では「宗教への誤解と日常のなかの宗教」についてお話

しします。日本では、「宗教」という言葉はかなり誤解を受けているところがあって、それが実際とは違うということを丁寧に見ていきたいと思います。その中で、じゃあ宗教は本来どういうものなのか、ということが問題になりますが、宗教を定義するのは極めて難しいことなんですね。どんな定義をしてみても、現実の宗教はそこから逸れてしまう、あるいは溢れてしまう、ということがあって、ビシッと、きっちり定義することは本当に難しいんです。ただ、固有の特性から宗教に迫っていくことはできますので、今回は三つの角度から、宗教とは、という話を織りまぜながら話を進めます。

後半では「スピリチュアル・ヘルスと宗教」ということで、誰もが無関係ではいられない、健康・医療の問題に宗教が関わってくる、というお話をします。そのために、特にスピリチュアル・ヘルスに注目して見ていきたいと思っています。スピリチュアル・ヘルスの意味については後半で詳しく説明をします。

宗教への誤解

では、前半の「宗教への誤解と日常のなかの宗教」という話です。まず現代の日本人に

とって「宗教」という言葉のイメージはあまりよくないんですね。もっと言えば非常に良くない場合もあります。例えば、宗教は自分に関係ないものだ、こう思っている人は結構多いと思います。それから、怖い・危ない、というイメージ。これも、何か染みついてしまっているのが現状だと思います。それから、時代遅れ。宗教というと昔のもので、だんだんなくなってきていて、これからの将来には関係ないものと思っている人も多いと思うんですが、これも実は誤解なんですね。ですから、この三つの点について、それぞれ丹念に見ていくことによって、実際はそうではないということを感じてもらえればと思っています。

宗教は自分に関係ないもの？

まず一番目、宗教は自分に関係ないだろうか、ということからです。現代の日本には「自分は無宗教」と言う人が多い。これは実際そうですね。「あなたの宗教は何ですか」と聞かれたら「いや、特にないです」っていうのが普通だと思うんですけれど、だからと言って、それは本当に宗教と関係ないと言えるだろうか、ということです。まず、事実とし

て、自覚的に特定の宗教を信仰する人は少ないです。「クリスチャンです」とか、「仏教徒です」と、はっきり言う人は少ない。いるんですけれども人口全体の割合だとかなり少ない。ただ、自分の宗教を言えない人も、日常生活の中では宗教的な感覚があるということが言えるんです。たいていの人は、宗教的な活動をすることに特に抵抗を持つことはないんですよね。むしろ楽しむことも多い。宗教的という自覚があまりないというのもあると思いますが、例えば、神社でお祭りがある、これを宗教的だから嫌だと言う人はあまりいないと思います。でも、お祭りは神社でやっていることで、明らかに神事ですので、宗教的な活動です。でも、自然に楽しむことができますね。それから結婚式もたいていの場合、宗教が絡んでいます。最近では宗教的な要素を入れずに結婚式をする人もいますけれど、それでもやはりキリスト教式の結婚式が今でも人気が高くて、それを良い雰囲気のものとして扱っているわけです。キリスト教式と言った時点で、それがキリスト教に属するものだとはっきり知っている、また自分がキリスト教徒ではないことも知っているけれども自然に楽しむことができる。こういう宗教性を持っているのが日本人です。

年中行事でも、日本人はいろいろと宗教に関わっています。バレンタインやクリスマスが宗教的なものという意識を持っている人はあまりいないと思いますけれど、それでも、

宗教的な起源を持つ行事なので、広い意味で宗教行事に入ります。それから、初詣とか、お彼岸、お盆……は、かなり宗教的な匂いが入っていますよね。宗教だということは分かると思うんですが、それでもごく自然に行事に参加して、楽しむとまでは言わなくても当たり前に「そういうもの」だと思って活動している。その活動をわざわざ拒むこともない。

日本人は「特定の宗教を選択しない」のが特徴です。つまり、「自分はこの宗教を選ぶ」ということをしないんです。ただ、いろんな宗教を取り込みながら、宗教的な活動をすること自体はわりと好きだと言えるんです。これが欧米だと、「自分は無宗教だ」と言う人は、宗教行事をあえて無視する、そういう傾向があります。でも、多くの日本人は、無宗教なんだけれども、宗教行事があったら自然にそれに参加する、それがわりと楽しかったりもする、という面があるわけです。

こういう、宗教に対する一貫性のない態度は「無自覚の宗教性」と言われることがあります。特に神や仏を信じているということはなくても、漠然とした自己を超えたものとのつながりの感覚を持っている人が多い。この「自己を超えたもの」は、神や仏だけじゃなくて、自然とか、大いなる存在とか、法則とかでもいいわけですが、そういう大きなものと繋がっているという感覚はわりと持っている人がいて、お寺や神社に行くと、何となく

そういうものと繋がっているような、厳粛な気分になることがあると思います。境内に行くくらいではならなくても、例えば、お寺の本堂に入って法要するとか、神社で祈祷してもらうのに中に上がったりすると、やはりそこでは厳粛な気分になると思います。これが、その人が持っている宗教性の現れです。だから、普段、お寺や神社に行って何かをするということを「宗教」という言葉で認識していないだけで、宗教的な感覚は十分味わっている人が多いんです。

ここで、「宗教とは何か」の第一番目、「聖」を挙げてみたいと思います。「聖」は宗教の本質概念とも言われるんですけれども、宗教では世界を「聖」と「俗」の二つに分けるんですね。空間と時間を区切って切り替えるという感じがあるんです。そういう一種の二元的世界観が宗教の特徴だと言われています。お寺、神社、教会……と言った場所は、「聖」と「俗」を空間的に区切って、聖なる場所を作ります。儀式も、その儀式の間は聖なる時間であると、時間を区切って「聖」と「俗」を分けています。

「聖」の定義も難しいです。「聖」とは何かと言われて説明できる人はあまりいないと思いますが、「人智を超えたものとの交流の感覚を伴っている」、さっきの大いなるものとの繋がりの感覚に近いものがあるとは言えます。この「聖」の感覚は、定義できなくても、

何となくこういうものだと分かる人は多いと思うんですよね。「聖」と言われて「ああ、こういう感じね」と分かる人はすでに、宗教的な人だと言えるんです。それは大部分の人間です。もちろん、宗教的でない人もいるし、それも構わないんですが、実際のところ、多くの人は「聖」の感覚を自分の中に持っている宗教的な人だと言うことができます。多くの人は宗教と無関係ではなく、日常でもそういう感覚を持ちながら暮らしているわけです。

宗教は危ない／怖い？

さて二番目のイメージです。「宗教は危ない／怖い？」。まず、これについては、「宗教」と「宗教組織／宗教団体」の区別が大事です。「宗教を信仰すること」と「宗教団体に加入すること」は明らかに別です。ここを区別しないで捉える人が現代日本では多いです。混同されがちなんです。多くの人が「宗教は怖い」と思うのは、宗教団体のことですよね。ある人が「神様を信じている」と言っても怖いとは思わない。危ないことをするのは宗教団体であって、宗教を信仰する個人ではありません。そして実際には、団体に所属し

ないで宗教的な行為をする人も少なくないんですよね。神社やお寺に行って、手を合わせる、何かを祈る、願う……こと自体が宗教的な行為ですし、瞑想も心身を落ち着けるのに良いということで健康法のように行われる場合がありますが、これも伝統的な宗教の技法なので、ある種宗教的行為だと言えます。ですから、宗教的な行為は普通の人もやっているし、個人でもやっている。また、神様や仏様を信じるという人も、だからといって必ずしも組織に属しているとは言えないですよね。日本ではむしろこのケースが多いんじゃないかと思います。神様を信じている人も、信じているから宗教団体に加入しようと行動を起こす人はあまりいない。団体に入らない宗教的な人はわりといるはずなんです。

そこで、「宗教とは何か」の二つ目、「神的な存在との内面的な関わり」です。人間の歴史として見れば、宗教はもともと、社会に根付いていて、その中で生まれ育つから自然に信じながら共同体を作ってきました。みんなが宗教的な活動をしているから一緒にしている、これが普通だったんですが、近代以降は、わりと個人がクローズアップされて、宗教を、儀式や形式の面よりも個人の内面に求める傾向が強くなってきています。団体や組織が必ずしも宗教の本質ではないということになるんですね。ただ、真剣に信仰するためには、やはり一人では限界もありますし、間違ったことを考えてしまうこともありますの

で、組織に属した方がいい場合もあります。組織が不要だということでは決してありません。だからといって、組織に入ることが宗教だというのは言い過ぎになるので、そこをちょっとバランスを取って考えてもらいたいと思います。

それから、「怖い、危ない」は宗教組織のことだと言いましたが、もちろん宗教組織が怖いとか危ないものというわけではないです。仏教やキリスト教など、伝統的な大きな教団は詐欺的でも暴力的でもありません。ですから、危ない宗教は、比較的、出来てから年数の浅い、新宗教ということになります。もちろん、新宗教もみんなが危ないのではなくて、全く無害な新宗教も少なくありません。一部の宗教団体、宗教組織が危ないということです。そして、危ないというのは、宗教そのものが持っている性質ではなくて、その組織の特性なんですね。組織は、どのようなものであっても問題があることが多いです。学校でも、部活でも、会社でも。どういう組織でも、時に犯罪的になったりすることがあると思いますが、特に、トップダウンの権威や支配力が強い場合に問題を起こしやすい。宗教団体はカリスマ的な人物がいたりするので、その人をみんなで崇めたりして、危ないタイプの組織になりがちな傾向はあるかもしれません。でもそれは、宗教自体の性質とは違いますので、そこは区別して考えてもらいたいと思います。

そして、宗教が「怖い、危ない」と言われる時に、マインドコントロールの問題もよく言われます。トップダウンの権威の中で考え方をコントロールされてしまう、信じるようにさせられてしまう。しかしこれは、宗教が接近しやすい傾向はあるものの、宗教だけの問題ではありません。例えば、振り込め詐欺は、意図的にマインドコントロールの技法を使っています。電話で少し話しただけで相手を取り込むわけですが、これはもちろん宗教とは全く関係がありません。また、陰謀論というものもあります。今現在、社会はいろいろと不安定で、不安も大きいですよね。社会が不安定な時は人の心も不安になりやすいので、歴史的にはそういう時期に新しい宗教ができて盛り上がる傾向にあるんですが、今、あまり宗教は盛り上がっていなくて、その変わりに陰謀論の勢いがすごくなっています。陰謀論は、特にトップダウンではない場合もありますが、ＳＮＳなどで「バズる」ということを目的に、デマやフェイクが飛ばされています。そこにマインドコントロール的な技法が使われて、取り込まれていく。構造自体は同じですね。それに集団でだんだん染まっていく。一つの組織に近い形になっています。ですから、今まではマインドコントロールは宗教がやるというイメージがありましたけれども、決してそうではないということが、この陰謀論の隆盛によって明らかになってきているんじゃないかという気がしています。

マインドコントロールはどこにでもあって、宗教もそこに絡むことがある、ということです。

「怖い、危ない」宗教というと、今、旧統一教会が話題になっています。旧統一教会は、日本で一般に誤解されている「宗教」のイメージに結構合っていると思うんですけど、宗教研究者の目から見ると、全く、宗教らしくない宗教なんです。というのは、さっきも言った「聖」です。大いなるものへの信仰が、旧統一教会の、特に幹部の人たちには全然見えないんですよね。大いなるものへの信仰は人間を相対化することになります。「人間なんて所詮この程度だから、謙虚になりましょう」というのが宗教の基本的な性質としてあるんですけれども、あの団体にはその性質がない。もちろん、宗教ではないとは言えないです、宗教法人ですしね。でも、宗教の組織としての悪い部分だけを取り出したような、そんな存在に見えます。ですから、旧統一教会を宗教の典型のように思うのは間違いです。実際の宗教の本質とはかなり外れていると思います。

ただ、難しいのはオウム真理教のケースです。オウム真理教は、確かに宗教らしい宗教なんです。それでいて非常に危険な存在だった。そういう意味で、危険な宗教が存在すること自体は否定できません。ですから、そういうものに取り込まれないためにも、宗教に

ついて知っておくことが大事です。人の心が不安な時は、人間誰しもが持っている宗教性が動かされやすいんですね。その誰もが持っている宗教性に、危険な宗教は付け込んでくる。それに取り込まれないためにどうしたらいいかというと、あらかじめ、自分の中に宗教性があるということを知っておくことが大事です。「自分は宗教には関係ない」と思っている人ほど、上手く勧誘されると危ない宗教に取り込まれかねない。自分の中の宗教性とどうやって付き合っていったらいいか、あらかじめ意識している人は、簡単には変な宗教に捕まりにくくなります。ここに、伝統的な宗教を勉強する意義があります。自分が決して宗教とは無関係ではないことを知って、でも敢えて宗教とは関係なく生きていくのか、あるいは宗教の良いところを部分的に取り入れながら生きていくのか、それを考えたことがあるかどうかによっても大分違ってくると思います。

ここまで、宗教には危ないものもあるけれども、宗教自体が本質的に危ないものではない、ということを見てきました。

宗教は時代遅れ？

次に、「宗教は時代遅れか？」についてです。今現在、世界の大多数の人は何らかの宗教を信じています。日本に住んでいると感覚として忘れがちですけれども、世界では宗教を持っていることが当たり前です。世界人口の約1／3がキリスト教を信じていますし、約1／4がイスラム教を信じています。その他、ヒンドゥー教、仏教、その他の宗教です。それを全部含めると世界人口の八〇％以上の人たちが何らかの宗教を信じているんですね。今現在、宗教はあって当たり前ということです。日本人の感じ方が世界から見ると例外的だということを忘れてはいけません。アメリカやヨーロッパで、「あなたの宗教は何ですか」と聞かれたら、「キリスト教」と答える人が半分以上いるんですね。宗教を聞かれて「無宗教」だと答える人は日本が飛び抜けています。これは他の先進国でも見られない現象です。日本人は外国の人と会っても、相手が宗教を持っていないと思いがちですよね、自分が持っていないから。でも外国の人は結構な割合で宗教を持っているんです。ただ、先進国の大都市圏に住んでいる人は、宗教と関わりなく生きている人の割合が多く

なりますので、そういうところから日本に来る人は宗教を持っていない人も多いと思います。ですから留学生に出会ってもその人が宗教を持っているという感覚はあまり受けないかもしれませんが、それはあくまでも先進国の大都市圏に限られます。世界的に宗教は常識の範囲内なので、そのことは意識しておかないとトラブルを招きかねません。外国の人と交流して理解を深め合う時に、宗教を理解するということは不可欠だということです。

では、今現在、宗教は衰退していっているのかどうかを見てみます。世界の人口が増えているので宗教人口自体は増加していますが、人口で割った増加率を見てみると、それほど増加しているわけではありません。キリスト教や仏教などの伝統的な宗教はほぼ横這いです。でも決して衰退はしていません。イスラム教の場合は率で見ても増加傾向にあります。ですから、宗教が衰退していっているというのは事実に反しています。

こういう状況を指して、「ポスト世俗化」という言葉が使われることがあります。中世まではどの世界でも、社会は宗教と政治が一緒だったわけですけれども、近代以降、だんだん宗教の影響が退いていって、宗教と関係なく社会が運営されるようになってきました。それがどんどん進んでいって、最後に宗教はなくなるだろう、と言われているのが「世俗化論」といわれるものですが、実際にはそうなっていません。国際政治の状況を見

ても、宗教の影響力は二十一世紀に入ってむしろ高まりつつあります。二十一世紀に入ってすぐ、アメリカで同時多発テロが起きて、一気にキリスト教とイスラム教の対立構造が見えてきました。実際には、あの出来事は宗教戦争と言えるほど宗教が主要因だったわけではないんですけれども、宗教がクローズアップされた、ということはあると思います。それから、アメリカ社会では、大統領選挙のたびに宗教票が話題になるんですね。信仰の強い人たちの選択が国の方向性にも影響を及ぼしています。そういう意味で、宗教はかなり政治に関わってきています。アメリカの政治に関わるということは、国際情勢にも関わってくるということです。非常に大きな影響力を持っているんですね。こういう状況なので、宗教が時代と共に衰退していくという考え方こそが、むしろ二十世紀的で時代遅れだということもできます。

では、なぜ宗教は衰退しないんだろうか、ということが気になります。これについては明確な理由が分かっているわけではないんですけれども、例えば、次のことが関係するのではないかと思います。「宗教とは何か?」という問いの三つ目です。宗教は、「救済」や「救い」に関わるものです。ある意味で、人が宗教に引きつけられ、帰依するのは、救済を得るためとも言えると思います。宗教の目的とも言えるのが救済です。そこで、宗教の

救済がどういうものか、ちょっと詳しく見ておきます。

救済にもいろいろ種類があります。パッと聞いて思い浮かぶのは、死後の救済です。死んだ後に天国とか浄土に行って、そこで安らかに過ごすことができる。それから、現世利益。お祈りをすることで願いが叶う。しかし、この二つは、現代人にとって、そのまま、すっと信じることは難しいと思います。「信じる」という態度とか「救済」の現象というのは、必ずしも物理現象で言えることではないので、一般の人からはちょっと了解しにくい面があります。この辺は宗教に詳しい人でないと納得しにくいと思います。ただ、三つ目に「心理的な救済」があります。宗教によって心の充実が得られる。これは必ずしも信じ難くはないですよね。これが説得力を持つのは、そういう宗教経験が現実にあるからです。神や仏、超自然的存在と出会って、人格がガラッと変化して、そこからその人がイキイキと生きていく。そういう出会いが事実としてあったかどうかはなんとも言えませんが、少なくとも本人が主観的に、そういうものと出会ったと認識していて、実際に生き方も変わる。そういう宗教経験を得た人が、他の人に比べてエネルギーに満ちあふれていると傍目から見えたなら、「宗教って本当かな」ってなると思うんですね。本当かなと思わなくても、少なくとも宗教ってすごいなという感じは受けると思います。そして、人生に

苦悩がつきものである限り、宗教を求める人がいなくなることはないと思います。

宗教は、自分に関係ないということは決してない、誰しも宗教性を持っている、宗教それ自体は決して危ないものではない、時代遅れでもない、ということを少しでも分かってもらえればと思います。

スピリチュアリティとは

ここから後半のテーマに入ります。誰にでも関わりのある「健康」や「医療」と宗教との関係を見ていきたいと思います。

「スピリチュアル・ヘルスと宗教」です。「スピリチュアル・ヘルス」自体がまずピンと来ない人もいると思いますが、「スピリチュアル」は近年、医療の現場でも注目されてきています。まず、WHOは「健康」の概念を、「肉体的」「精神的」「社会的」に良好な状態、と定義していますが、一九九八年に、これにもう一つ「スピリチュアル（霊性的）」を加えることが検討されたんです。実際には、そこで採択にいたることはなく、現在まで実際に健康の概念に入ってはいないんですけれども、入れるべきかどうか継続的に議論は

進んでいます。ＷＨＯが健康にスピリチュアルなものは不可欠だという見方をし始めたことによって、医療の業界で話題になってきたわけですね。この「スピリチュアル」という言葉ですけれども、日本語話者にはイメージしにくいところがあります。英語の辞書で見ると、「精神的な、霊的な、崇高な……」とあって、かなり違うニュアンスの訳語が並んでいます。またさらに、カタカナのスピリチュアルも日本では独特のニュアンスが加わってしまっていますよね。霊的存在、前世、オーラ……といった心霊主義的なもの、超自然的な出来事と関係しているイメージがついてしまいましたけれども、本来の意味は必ずしもそうではありませんし、ＷＨＯが検討するのは超自然的なものではありません。では、医療や学問の場面でスピリチュアルが何を意味するのか、ＷＨＯの議論の中からスピリチュアリティの意味を取りだしてみました。

自然界に物質的に存在するのではなく、人間の心にわき起こる気高い観念領域に属する。

人間の「生」の全体像を構成する一因。生きている意味や目的についての関心や懸念と関わることが多い。

ちょっと堅苦しい言い方でピンと来ないかもしれませんが、まずは、物質的なものではないということです。日本語のカタカナのスピリチュアルは、何か物質的なレベルにまで干渉してきそうですけど、そうじゃないんですね。あくまでも観念上のレベルです。それから、生きている意味や目的についての関心に関わる。これはスピリチュアルの中心的なモチーフになります。大事なところです。そしてスピリチュアル・ヘルスは、そのような「スピリチュアルの健康」ということです。心身を超えた次元、より深い部分の健康、と言うこともできます。ところで「心」も物質的なレベルではないわけですけれど、それとどう違うのかと言うと、心に関しては「メンタルヘルス」という領域がありますね。このメンタルヘルスは社会的適応が目標になっているんです。日々を健康的に生活できるかどうか。毎日、学校や会社に通って、社会生活をして、人間関係も上手くいって……、となれば、この人はメンタルは健康だと見なされるわけです。でも、実はその内面では、「人生の意味がわからない」「自分が何のためにここにいるのかわからない」「自分は一体何なんだろう」と非常に空しい思いで暮らしている可能性がある。そういう場合にメンタルヘルスではアプローチのしようがないんですが、そういう部分が充実していないと人は健康だと言えないんじゃないかということなんですね。そこを拾い上げるのがスピリチュアル

・ヘルスという概念になります。

スピリチュアル・ケア

こういうことは、普段それほど意識されません。無自覚に生活をしているものなんですが、スピリチュアリティの問題がはっきり自覚される場面が、人生を支えてきた生きる意味や目的が、病や死の接近によって脅かされて経験する、「全人的苦痛」がある場合です。つまり、大きな病気をするとか、死ぬことが分かってしまった状況。こういう時に、今までの人生は何だったんだろう、生きてきた意味はあるんだろうか、ということが突然襲いかかってくるわけです。これが「スピリチュアル・ペイン」というものですが、それが病気になった時、つまり入院患者さんに起こりがちなので、医療場面でのスピリチュアル・ペインと、それに対してケアを試みる「スピリチュアル・ケア」が、近年、話題になってきています。

典型的には終末期医療の場面なんですけれども、それ以外にも、医療ケア全般に関わってきますし、障碍者、犯罪被害者、自殺志願者などにも当てはまるはずです。生きる目的

や意味を見出せない苦悩があれば、それはみんなスピリチュアル・ペインと言えるだろうと、そういう議論もあります。もちろん本当に死が迫って、生きる意味が分からない極めて重大な場面と、普通に暮らしているけれども毎日が空虚だという程度の差はあると思いますが。

では宗教とスピリチュアリティにどういう関係があるか、ということなんですが、区別することはできるんです。ＷＨＯがスピリチュアリティを考慮していますが、そこに宗教は入っていません。ただ、宗教とスピリチュアリティが隣接領域で、親和性が高いことは間違いありません。例えば、仏教のテーマはまさに「苦」です。「苦」とは一体何なのか、それとどうやって付き合っていけばいいのか、が根本原理になっています。また、他の宗教も含めてですが、宗教は基本的に、生きることに意味づけを行う機能を果たしています。つまり、神や仏との関係性の中に自分が今ここに生きている、そういう世界観を作っているのが宗教です。宗教は生きることの意味に直結しています。宗教がなくても生きることの意味を見出している人はいますし、宗教が不可欠ではありませんが、宗教とスピリチュアリティが非常に親和性が高いということは分かってもらえると思います。

ところで、現代の医療は科学であるはずなのに、科学的じゃない話をしているなと思う

人がいるかもしれませんので、ここでちょっと宗教と科学についてコメントをしておきます。宗教と科学の問題は、私が専門としているところで、非常に興味深い領域なんです。ごく簡単に言っておきますと、世間では、宗教は科学によって否定されていると思う人がわりと多いように思います。でも実際にはそんなことはないんですね。科学はもともと、物理現象に限って探求する活動です。物理的な事実関係を解き明かすのが科学で、そこからはみ出したものは最初から扱っていないんです。だから、宗教が扱うジャンルは、もともと科学が無視しているものなので、宗教が科学によって否定されるということは、理論上不可能と言えるんです。科学が扱ってくれないものを変わりに宗教が扱っている、科学と宗教は相補的な関係にあるとも言えます。だから、宗教が物理的事実について述べていることは結構間違っていることもありますけれども、昔から伝統的に言ってきたものが科学によって訂正されたら、「ああ、そうか」と、そこは納得するべきですし、科学の方は、もともと無視してきた領域で、宗教が伝統的な蓄積の中から何か言ってくれるなら、「そういう考え方があるんだ」と取り入れる必要がある。そういう意味で相補的な関係にあると言えるんですね。科学の目的は事実解明に限定されて、意味や目的については何も言うことができない。スピリチュアリティは意味や目的がテーマになるので、科学的な医療と

してできるものではない。そこは宗教的な領域の方が接近しやすいということになります。

緩和ケアと宗教

大きいものから小さいものまで、スピリチュアルな苦悩はいろいろあると思いますが、もっともケアが必要で、実際に実践もされているのは緩和ケアの場面です。治療が不可能で、死ぬことが分かっている。その中で、病気に伴う心と体の痛みを和らげる。患者とその家族のＱＯＬ（Quality of Life）を改善する。「心の痛み」は医学的治療の対象ではないので、それを改善するのがスピリチュアル・ケアです。これは今、実際に医療に組み込まれています。そして、そこに宗教が大きく関与しているということをこれから見ていきたいと思います。

緩和ケアを行う場所として主にホスピスがあります。ホスピスの源流は、中世キリスト教修道院に設けられた巡礼者の宿泊施設だと言われています。最初の近代ホスピスは一九六七年に創設されました。「セント・クリストファー・ホスピス」という超教派のキリス

ト教財団です。ですからホスピスはもともと、キリスト教の文脈の元に誕生した施設でした。今は仏教版のホスピスもあります。「ビハーラ」という、サンスクリット語で「安住・休養の場所」という意味の終末期ケアの施設です。仏教はもともと「老・病・死」を課題としてきたんですね。ですから、その苦悩に答えるために、医療・介護といった社会福祉の各分野と連携を進めています。

キリスト教も仏教も、スピリチュアルケアに実際に関与してきているということが分かると思います。

ところで、欧米ではもともと医療の場面に宗教者が関与する伝統があるんですね。チャプレンという人がいます。病院や学校、軍隊などの施設で働く聖職者のことですが、欧米のホスピスには通常、このチャプレンが常駐しています。どこの病院にでもチャプレンがいるとは言いませんが、終末期医療の施設には基本、チャプレンがいることになっています。まさにスピリチュアル・ペインに対するケアを、宗教的に行う専門家がいるわけです。

日本では、チャプレンがいないわけではないですが、非常に少ないです。キリスト教系の病院にしかいません。じゃあ、どうしたらいいかということで、今、「臨床宗教師」と

いう人たちがいます。日本でも宗教的ケアの専門家の養成・配置が進められているんですね。これは国というよりは、東北大学のプロジェクトとして始まったものです。東日本大震災をきっかけに、宗教的ケアの専門家が日本にも必要だということで、東北大学に養成コースができたんです。臨床宗教師になる人は、もともと宗教者の人です。僧侶だったり、牧師さんだったり、シスターだったり、が養成コースを受けて、資格を取って、日本各地の病院で仕事をしていく。実際に「なりたい」と言って講座に通う人は多いようです。

臨床宗教師は、特定の宗教の立場でケアを行うのではなくて、個別宗教に対しては中立的な立場でいます。布教や教義の押しつけをしない、傾聴と対話に基づくケアを行うということになっています。特定の宗教を除いて果たして宗教的ケアができるのか、と思うかもしれませんが、宗教は、どの宗教であっても共通して「目に見える世界の裏に目に見えない世界がある」という認識を持っています。言い換えれば、物理的世界だけが世界ではなくて、スピリチュアル、観念のレベルのものも実在であるような感覚、もっと広い世界があるんだということ、その中では、「死」も決して「虚無」ではないんだということを世界観全体を通して表現できる、それが宗教者なんですよね。そういう態度を持って傾

聴、対話を行っています。

また、患者側も、心理カウンセラーではなく宗教者だということで相談する内容が変わってきます。超自然的なことを言っても相手は嫌がらないと思えるわけです。よりスピリチュアルな次元に対して、遠慮のない対話ができるメリットがあります。ですから、臨床宗教師はこれからも日本で、スピリチュアルケアの担い手として非常に重要な役割を持つと思われるんですが、実際には人数がまだまだ足りていません。専任の職業になりづらいこともあるんですね。海外ではチャプレンが職業として成立していますけれども、日本では財政的に支えるような団体はありませんし、各病院がスピリチュアルケアを行う人を雇う余裕がなかったりもしますので、なかなか普及しづらい。今後期待される存在ではあるものの、この高齢化社会の中で人数が十分足りるところまではいかないのではないかと思います。難しい問題です。

さて、日本で終末期にある人が、実際に宗教的なニーズを持っているのか、という疑問があると思います。それについては、患者さんも日本人なので宗教に無自覚であることが多いですが、その一方で、自分が死ぬことが分かってしまっている場合、「あの世」で家族や親しい人に再会することを期待する人も多いです。そこに潜在的な宗教のニーズがあ

るんです。看護師さんからみて、「終末期患者が宗教的ニーズを持っている」という回答が九四％だったという調査もあります。ですから、臨床宗教師がもっと普及すればいいんですけれども、実際のところ、今現在、日本で暮らしている外国人も含む患者の宗教的ニーズを支えているのは看護師です。宗教的ケアを提供できなくても、患者さんが、その人らしい生活行動ができるように精一杯サポートをされています。看護師だからといって宗教に詳しくなければいけないということはないんですけれども、少なくとも患者さんの宗教を認めて、共感できるレベルの感覚を持って、なるべく偏見は持たず、宗教へ積極的に関与する必要はありませんが、肯定的にケアしてあげられればと願います。

医療が宗教から学ぶこと

では最後に、もう少し広い意味で、医療と宗教についてコメントしておきたいと思います。医療が宗教から学ぶこと、というのがいくつかあると思います。まず、宗教の健康観は基本的に全人的です。人間全体を見る。「病気を見るのではなく患者を見る」というような言い方がありますが、そういう見方を、もともと宗教の伝統的な健康観は持っていま

す。古代から宗教は医療と関係がありました。宗教の本の中には健康や病気についての記述もあります。そこでの病気の理解や治療には間違いも多いんですが、健康の理解については医療も宗教から学ぶべきところがあると思います。例えば「身心一如」という考え方があります。心と体は別の原理によるものではない。これは今、見直されてきている考え方です。近代医療は、体を分割して、部分で病気を見てきました。これは大きな成功を収めてきたんですが、その代わり、患者さん全体を見落としがちになっていると、最近言われるようになってきています。部分で見ることが悪いわけではないんですけれど、全体を見ることをつい忘れがちになってしまう。それを宗教的な健康観は教えてくれます。

それから、近年では生命倫理の問題も大きく話題になります。これは先端医療があるから起こってくる問題なんですよね。生まれてくる前の胎児や胚に技術を加えることができてしまう、終末期の患者さんを延命することができてしまう、臓器を移植できてしまう、から起こってくる問題です。これは宗教と関係なく倫理の問題ですけれど、世俗的なレベルで考えると、新しくできた技術を容認する前提になってしまいがちなんです。新しい技術ができて、それにはこういうメリットがある、と分かれば、それを使う前提で考えてしまう。この技術をどう捉えれば倫理的な問題はなくなるだろうかと、法律論になりがちで

す。そうなると、その技術を使うことが本来人間にとって好ましいことなのか、それを使ったら人間が幸福になれるのか、その本質を置き去りにしてしまうことになります。その点、宗教には、この分野に示唆を与えるだけの知恵の蓄積があります。宗教は「生」と「死」についての思索の蓄積を持っているんですよね。

どの宗教でもたいてい「生と死」はセットで考えられます。現代医療や世俗的な倫理では、「死」は「悪」であって、取り除きたいと考えるわけですけど、実際に「死」は取り除けません。どんな人にも必ず最後に「死」が訪れます。これは、どんな現代医療を使ってもどうしようもないことです。だから、最初から「生」と「死」をセットで考えて、死を含めた人生全体から「いのち」の大切さを考えていく。宗教は、「死」を極端に怖がることをしませんし、また、関係ないとも思いません。世の中にはいろんな人がいます。死ぬことをとても怖いと思っている人もいます。死ぬということをケロッと忘れて生きている人も多いです。でもそれはどちらも極端です。怖いのは当然だけれども、その感じをよりよく生きていくために利用していく、これが宗教の知恵なんですよね。この知恵は、普段生きていく上で使うこともできますし、生命倫理の場面では、まさにその知恵が必要とされていると思います。

先ほどから言ってきたように、いわゆる「無宗教」の人の意識や世界観の中にも、宗教的な感覚は必ずあります。ですから、そういう感覚を無視するのではなくて、そこにうまくフィットするような宗教思想のようなものを取り込みながら、公共的な倫理を練り上げるべきだと思いますし、議論していく必要があると思います。

今日は、宗教は、いつの時代も、全ての人に関係があるし、役に立つこともある、ということを見てきました。簡単におさらいをしたいと思います。

宗教、特に「宗教」という言葉は、無理解・誤解にさらされているんですけれども、本来は誰にとっても身近なものです。無宗教と言っているからといって宗教と無関係ではありません。宗教の組織や団体は怖いとか危ないとか思われがちですが、それ以前に、人間は誰しも宗教性を持っていて、宗教的な行動をしています。ですから、自分は宗教性を持っているということを自覚して、その宗教性とどうやって付き合っていくか、考えてもらいたいなと思います。それは、特に病気のような危機に際して、死が迫る大きな病気でなくても、病気やケガは、それによってやりたいことができなくなることがあります。目指している職業につけなくなったり、スポーツに人生をかけている人が突然できなくなることもあります。そういう時に大きなスピリチュアル・ペインがやってきますが、人生をど

う捉え直したらいいか考える時に、やはり宗教は大いに役立ち、生きる支えになる可能性があると思います。そういうことがあったら宗教のことを思い出して、少し触れてみるのもいいと思います。例えば、伝統宗教の文献です。聖書でも、お経の現代語訳でも、そういうものの中には、たくさん知恵が詰まっています。特に、生きる意味や目的に関して教えてくれることがいっぱいあります。伝統的な宗教の文献を読む時、危ないとか、怖いとか、そういうものに接近することはありません。自分がスピリチュアルなレベルで危機に陥った時、宗教に救いを求めることは決しておかしなことではなくて、有益なことであると思います。宗教をより身近なものとして感じてもらえれば嬉しいです。

今日のお話はこれで終わります。ありがとうございました。